

編集室から

このところ、毎年・毎月天候がおかしくなっていると書いているような気がしています。

もう八月になるというのに北陸は、未だに梅雨があける気配すらありません。

その一方で、自宅では赤とんぼが舞い始めたとの報。梅雨に赤とんぼ...。これでは俳句の季語はどうすれば良いのでしょうか？風光明媚・四季豊かなこの国の季節が壊れ、文化・風情面にも影響が及びつつあります。

思えば今から40年ほど前のオイルショックの際、大都市・札幌にいた私の家族は商店の店先から売り物が消えるという衝撃的な体験をしています。当時中学生だった私は、日々の生活に追われる母の後姿を観て、密かに自給農家となることを決意したものです。

今では能登で細々とした自給農家・漁家である家内の家を終末だけ手伝っていますので、当面の食糧に困ることはありません。ところが、各地で繰り返される災害・天変地異・気候変動がこれ以上激しさを増すなら、猫の額ほどの田畑から取れる米・野菜も、肝心の収穫が危ぶまれます。

現に、山から猪・熊、はては鹿など大型の獣が降りて荒らす獣害、天候不良による病原菌の発生で折角の作物が収穫後に腐るなどという現象も起こっています。

他方、「賞味期限」という魔法の経済原理で大量の食物が廃棄され続けています。鰻の稚魚枯渇による高騰を見るまでも無く、この国の食環境は確実に崩壊しつつあると、強く感じるのは「現場」に近いからでしょうか？

自給農家も食べられなくなる時代がくれば、都市民はいうまでもなく、なす術がありません。なけなしの札束を握り締めて、店を走り回るつもりでしょうか？

40年前の教訓が生かされますように。(は)



Chintara

本ニュースにレギュラー執筆していただいている川島さんが「能登の夜市」の姉妹店を開店されました。

上京された際、ご利用になってみてください。

もちろん、川島さんご自身もお店に立っておられます。

日本酒バルChintara

03-6427-8183

17:00~24:00

金曜17:00~28:00日曜祝休

渋谷区道玄坂2-19-3ライオンズマンション道玄坂1階

このニュースは、計画に携わる若手の技術者を育てることを目的に発行を始めました。その後、計画という仕事の内容や、普段、計画マンがどのようなことを考えているのかなどに触れて、少しでも業界を知っていただければと考えて編集しています。

2013/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

〒920-1167

石川県金沢市もりの里1-149-302

電話 076-233-7217

Fax 076-233-7375

Email usric@neting.or.jp

2013/08

(株)アスリック

<http://www.neting.or.jp/usric>

景月



真夏の奈良公園にて
by hama

寄稿『思いを繋ぐ 無謀をベストにした汗』

フリーランスライター 小杉 智美

今年三月三十一日正午、石川県内の有料道路三路線が一斉に無料化した。

昨秋、この無料化関連事業の一つに関わるご縁をいただいた。昭和四十六（一九七二）年に能登海浜道の起工式が行われて以来四十二年間の石川県の有料道路の歴史を一冊にまとめる仕事だ。平成二（一九九〇）年に石川県道路公社が発足した際に発行された有料道路二十年史の後を受けられる形で製作されたため、正確にはその後の二十二年分が今回の主な対象となった。

六月に刊行した記録誌「石川の有料道路のあゆみ」の制作にあたり、過去数十年分にわたる膨大な資料を読み、関係者にヒアリングを行った。その際、多くの方が、あの時、あの決断をしてよかった」と口にした。赤字路線覚悟で奥能登を貫く縦貫道を作ったこと、実質的な値下げの敢行など“あの決断”の内容は様々。大袈裟な言い方をすれば、どれ一つをとってもひとつ間違えば石川県財政を圧迫する要因になっていたかもしれない事柄ばかりだ。

その、無謀の結果は、たとえば 石川県道路公社が管轄した路線全てが料金徴収期限よりも前の無料化を実現している。

そこには多くの人が口にした“あの決断”の意志を継ぎ、思いを繋いで無茶をベストに変えるた

濱のつばやき 『世界標準』

近頃、最新の脳科学・心理学について見聞することが増えた。

ある研究によると、脳の感情を掌る部位に損傷を受けた患者は、意思決定ができなくなるといふ。この症例から「人間の意思決定は、感情によってなされて（深く影響している）」という説が提唱されている。また別な研究によると、感情は記憶に影響を受けているといふ。

これらの説を統合すると「人は記憶から感情を起こし、それによって意思決定している」と理解できる。つまり、我々は気付く・気付かぬに関らず、記憶によって操られている節があるようなのだ。その割合が大きい人ほど、全く新しい事に挑戦する意思決定が困難なのであろう。

近隣諸国に目を向けると最近、特に関係性が危うくなっている報道が目につく。

彼の国は、首脳陣でさえ子女を海外に留学させ、個人資産も海外に移転させてあるらしい。自国を全く信用していない国家元首による政治。この国から眺めると全く理解できない構造と感ぜられる。

ところが、彼の国では家族以外は信用できぬ・騙されてはならぬと説かれ続けるという。

日本は、つくづく良い国だと思ふ。おおよそ何処の家庭もそんな教育はしていないことだろう。むしろ、親も気付かぬうちに、「清き明き心」こそ最上と教え伝えられてきたのではないか。それが災害時にも略奪・暴動の起こらない国となって現れる。この国とは、そんな民の国なのであ

めの多くの努力があり、汗があった。ヒアリングで語られた汗もある。語られなかっただろう努力は語られたものより多いに違いない。それは“あの決断”が、自分のためではなく、利用者のため、地域社会のため成されたことだったからこそそのものだ。

四十余年の長きにわたって他者を思い繋がれてきた思いに触れる機会をいただいたことは、私にとっても大きな糧となった。勉強をさせていただいた。

残念なのは「あゆみ」は記録誌という性格上、汗も努力もほぼ結果のみを淡々と伝えるに止めざるを得なかったことだ。ただ、別冊の資料編に編集されている歴代理事長の座談会には、その片鱗が興味深くちりばめられている。携わった者としては、是非合わせてご覧いただきたい。

- 能登海浜道路 昭和四十六（一九七二）年着工・四十八（一九七三）年開通
 - 能登半島縦貫有料道路 昭和四十八（一九七三）年着工・五十五（一九八〇）年開通
 - 昭和五十七（一九八二）年、全線開通にあわせて二つの有料道路の総称を能登有料道路に統一。現在の愛称は「のと里山海道」 十か月の無料化前倒し
 - 川北大橋有料道路 昭和四十六（一九七二）年着工 1・五十二（一九七五年開通
 - 同七年三か月前倒し
 - 能登島大橋有料道路 昭和五十四（一九七九年着工・五十七（一九八二年開通
 - 同八年九か月前倒し
 - 田鶴浜道路 平成八（一九九六年着工 2・十二（一九九八年開通 同十五年前倒し
 - 1 着工年は加賀産業開発道路の起工日に拠る
 - 2 有料道路事業の着工年。公共事業としては平成元（一九八九年）から。
- 出典：石川の有料道路のあゆみ「有料道路四十二年間の記録」 石川県



【プロフィール】
（こすぎ とみみ）企業・自治体の紹介、案内、広告、webマガジン、個人経歴の作成までオールジャンルに手がける。文章を通して表現力、想像力をアップさせる講座開催準備中。

人間の行動は極論すると、恐怖を因とするものと、欲求を因とするものに大別できる。欲求には、我欲と大欲があり、この国の民は変わったといえども未だ大欲（博愛）を忘れてはいない。

しかし、世界標準は真逆の疑心暗鬼を旨とする。つまり、清き明き心のままで、これらに対峙せねばならぬ。それがこの時代を難しくしている。

ある競技で日本の応援に非があるとされたが、実際は相手国の応援団が自作自演して日本が非難されるように企んだと報ずる記事があった。

これに呆れ憤る気持ちは判る。が、そのままでは同類となる。幼少期から他人を信ずるなど繰り返して記憶に刷り込まれた哀しい人間がなすことには、罪を憎みて人を憎まずの対応以外、「清き明き心」の道はなかる。ただ、「清き明き心」そのままでは、疑心暗鬼側には、付入る隙だらけの阿呆に見えることだろう。ここが難しい。

戦前、アジア進出のコンセプトは大愛・博愛だったかも知れぬ。が、しかし。当時は世界を知らな過ぎた。そして手段を誤った。その反省は謙虚にすべきである。

如何に日本標準と世界標準が異なり、その上で、清き明き心”を失わず、善き国とは如何なるものかを伝えて行くこと。

それが、この国の民に課せられたほんとうの開国・国際化なのかも知れない、と思ふ。

今年も、終戦記念日が近い。

きただより59 弘前大学地域社会研究会 上村 康之
『「三陸復興国立公園」に編入された八戸市の「種差海岸」』

東日本大震災から2年以上が経過した。青森県では太平洋側である八戸市や三沢市が大きな被災を受けたが、岩手県、宮城県、福島県の被害があまりにも甚大であり過ぎたため、「第4の被災県」とも呼ばれ報道も少ないように思える。八戸市市街地の臨海部は、工業団地、漁港・漁業関係施設、物流基地など産業関係で占められているため、人的被害は被災3県の各都市に比較すれば少なかったが、被害額が約1,200億円にも及んだ。

このような被災地再生の象徴として、また青森県や八戸市の観光振興という点が配慮されたのか、5月24日に「三陸復興国立公園」が誕生した。これは、「陸中海岸国立公園」(岩手県、宮城県)に青森県の「種差海岸階上岳県立自然公園」を編入し改称したものである。そこで、青森県外ではご存じの方が少ないであろう種差海岸について紹介したい。

青森県の太平洋側を下北半島尻屋崎から南下してくると、八戸市北部まではほぼ砂丘地帯が連なり、一方、八戸市の南側から岩手県北部にかけては、黒崎や北山崎に代表される断崖絶壁も多く見られる岩石海岸である。種差海岸は両者の海岸地形の中間に位置し、ウミネコの繁殖地で国の天然記念物の蕪島から大久喜に至る12kmに岩石海岸と砂浜海岸が交互に続く海岸線であり、東北地方の太平洋岸にあって特異な自然を形成している。私事であるが、10年ほど前に葦毛崎から白浜海岸を眺めた時、その砂浜の美しさが強烈に印象に残った。

約650種類を超える多様な植物が、わずか880haという狭い範囲で見られるのも種差海岸の特徴である。これは複雑な海岸線に加え、草原や湿地など多様な環境があること、春から夏にかけて千島海流(親潮)に乗ってくる冷たい東風の「ヤマセ」が吹く、冬に雪が少ない環境などがあげられる。

文化人も多く種差を訪れている。作家の司馬遼太郎は、日本各地を旅して執筆した『街道をゆく・第2巻陸奥のみち』で「どこかの天体から人がきて地球の美しさを教えてやらねばならないはめになったとき、一番にこの種差海岸に案内してやろうかとおもったりした」と絶賛している。日本画の巨匠である東山魁夷は、種差海岸の一本の道をモデルにした名作「道」等の作品を残している。

これまで、八戸市は昭和6年に国立公園法が制定されたことを契機に「十和田国立公園八戸コース」構想等の運動をしたがかなわず、昭和12年に国の名勝には指定された。その後も国立公園化の動きはあったが実現しなかった。今回の「三陸復興国立公園」への編入は喜ばしいことではあるが、これまでのかなわなかった運動を顧みると、真の国立公園編入の評価基準とは何のかという多少の疑問も湧く。

現在、NHK総合の朝のドラマで八戸市の南に位置する岩手県久慈市を舞台にした「あまちゃん」が人気を博し、観光客が増加している。ぜひ、足を延ばして種差海岸を訪れてその自然美を味わって欲しいものである。

『"祭り"は誰のためにあるべきか』
株式会社GARBAGE代表 川島 嘉浩

先月の7月5日・6日と私の故郷である石川県能登町宇出津の「あばれ祭り」に3年ぶりに行ってきました。店舗事業をはじめから中々休んで行くことに不安があったのですが、今回はスタッフを信じて能登に帰省することができました。みんなありがとう!!

さて3年ぶりに祭りに帰ったみて

60基近くあったキリコが41基に減っていた事

ひとことでいえば巨大な灯籠であり全高約5メートル~大きいもので

20メートル以上もある人が担いで動かす建造物です。

地元出身以外であろう多くの若者が祭りに参加している事

町内の法被を着ている人の方が圧倒的に少ない事に

驚きました。

に関しては単に過疎化もあるのですが、それ以上に地元出身者で外に出た人たちが祭りに帰ってこない、もしくは帰っていても祭りに能動的に参加しない事が起因しているように感じます。理由は多々あるとは思いますが、地元に残っている人間との温度差みたいなものではないでしょうか、祭りに対するとらえ方が"同窓会程度"という希薄になっているのを感じます。

は能登を代表する祭りという事もあって昔から近隣の市町村から人は集まっていたのですが、それはあくまでも観光客という立ち場でした。しかしと相まって"町内というコミュニティ"が弱体化しつつある中、祭りの担い手を外部の人たちに依存せざるを得ないというのが現状でしょう。

はの結果です。昔は皆町内の法被を着用する事が当然でしたので『町の人だ』とすぐわかりました。また自分の町内の法被が一番格好いいと自慢しあったものです。しかし今はどの町内の10代~20代の若者も同じような、言い方は悪いですがまるでチンピラのような恰好で練り歩いています。

ここからが本題で『祭りは地域観光資源となりうるか?』という論点に発展させたいのですが、東京から連れていった家族やその友人の回答は"否"でした。

『神事というよりも、恐い若者達がただ呑んで暴れているようにしか見えない』

『祭りとしての美しい規律性や一体感が感じられない』

『他人の飲み会を覗きに来たような感じ』

とまあ散々な批評でした。

これらの意見だけで判断すべきものではありませんが、私にとって祭りとは"年に一度、宇出津人に戻って方言で騒いで暴れる特別な日"だったので行政を含めてその祭りを観光資源として外に打ち出していることに違和感を感じておりました。ですが、その地元民・地元出身者のものであるべきと考えている"祭り"が前述した要因等からも、その意義を大きく失いつつあるのでは?と感じた事にすこし悲しくなった帰省となりました。

『富士の国から ~大魔神のたび~』

~ 英国の旅 ~ 静岡県職員 溝口 久

大英博物館見物でくたくたになり、おなかも空いたところで遅い昼食にと、ロンドン・ブリッジの食品市場バラ・マーケットに向かった。市内の移動は専らバス、そう例の赤色の2階建てのロンドンバスである。バス乗車一回につき一律2.30ポンドとなるが、長女が用意してくれたオイスターカードを使うと1.35ポンドと安くなる。

バスは低床車両であり、驚いたことにいすやベビーカーも畳まずに搭乗可能なスロープとその乗車スペースが用意されている。2階に乗ると市バスで街中観光が楽しめる快適だが、乗車している時間、降車するバス停を意識して早めの行動をおこさないと降りそびれることにもなる。揺れも2階は大きいから注意して移動しないとこける羽目になる。

バラ・マーケットに到着、そこはロンドンブリッジ駅近くの高架下にある。

高架下という条件不利地、何か手を入れないと薄汚れた雑風景のところを再開発したエリアなのかなと思ったが、どうも違うらしい。

バラはローズのことではなくて、“Borough”は“自治都市”という意味で、その歴史をひも解けば、なんと紀元43年まで遡ることができる。この時代からこの国に生きる人々の台所としてテムズ河畔にて栄えていた。



対岸からここを訪れるために、この街最古の橋ロンドン橋の建設がなされたようだ。ロンドンを陥落させるために人々の食を奪う手段としてローマ軍はロンドン橋を破壊する強硬手段も辞さなかったとのこと。現在はオーガニック・フード・マーケットとしてはロンドン1の規模を誇る。

英国、ヨーロッパの食材を中心に、生鮮食品、チーズやハム、ソーセージ、パン、その他の乳製品、オイルのほか、南米からのスパイス、アジアからの野菜、茶などのインターナショナル・フードが輸入され、130を超す店が出店している。

精肉や魚介、野菜が「ミドル・マーケット」、小規模生産のアルティザン（職人の伝統技術による）フードなら「スリー・クラウン・スクエア」、ファースト・フードは「グリーン・マーケット」に大まかに分類されている。

常に新しい味を探求するシェフらも赴くなど、バラ・マーケットは英国食文化の発展の一翼を担う存在と認められている。

21世紀に入り長期的な不況からの復活を経た英国では、人々の経済活動も活発になり市民らはスーパー・マーケットの画一的な商品に飽きたらず、「より美味しいもの」「体にいいもの」といった食への関心が高まっている。

そのことをここオーガニックフードマーケット「バラ・マーケット」で味わうことができる。今回の旅でおおざっぱな料理はあったけど、まずい料理には出会わなかった。（つづく）

